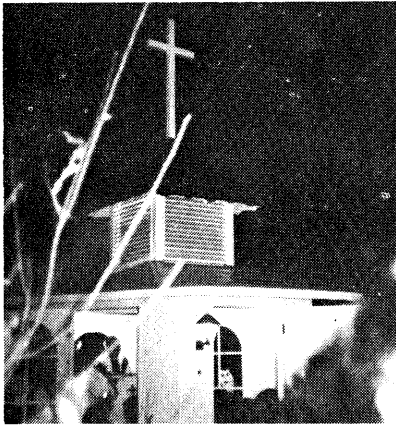


## わが道をゆく

鈴鹿美和子



こわいもの知らずに独走して、去年十四年間のテレジアの園を閉じました。もう二度と幼稚園の先生になることはあるまいと思うと、今日までいろいろ研究会で受けさせていただいた教えは、何と尊く立派なもので、甘美なあと味さえ残っています。封印してしまい込むには惜しく、いまだに周郷先生の「教育の発明」論に熱気をもやし続けています。手でふれさせ、足でふみしめて、実際に経験させること、芸術をわかる心をどうやって育てさせようか、等々。

お正月のために暑い盛りに蒔いた葉ぼたんが、何回か移植されて、それらしく美しい白や紫のちぢれた葉を揃えて、なおその一本一本は皆ほんの少しづつ葉のそまり方に差があって、毎朝あかず眺めたこと、誰も種子をまかないのに、春にはつみ切れないほどののびるが自然のめぐみを教え、お迎える母親とひとときつみ草のあと、のびるは小さな胸に大事そうにきれいなハンカチに包まれて散って行ったっけ。少しでもよかれと思う教育へ努力した思い出は、あたたかく熱く楽しく、時折脳裏をかすめます。ところが静かにふり返ってみると、何か教育者として十分なことをしなかった後悔をふつと感じるのです。

このもやもやの思いは「神不在の教育」だったことを洞察しました。全く申し訳ないことをした——といまさらどうしようもないのに、何か落ちつかないやるせない気持ちにしばらく苦しみました。自然の中でかみさまを語ってきかせたあの時の素直さの中に、なぜもっともっと入り込んでおかなかつたのだろう、今のうちまわってくやんでみても、もうあの幼い素直な日々は、あのひとたちに帰って来ない!!

私のしなければならぬ仕事だったはずなのに。

戦争中に夢多かるべき時期を、ただがつがつと生活に追われたあわれな母親たちは、神への思慕の念など無用とばかりなかなか聞く耳を向けない。けれどそれなりの芸術論があつて、「私たちは大へんな時代に育ちましたから、せめて子どもには芸術性を持たせたいと思ひまして、お絵かきとピアノに行かせてます」と言う。行かせないより行く方がいいかも知れないけれど「魂の無い芸術」のような気がして何かわびしい思いがする。そういう母親に育てられているかあいそうな子どもたち、ああ私にはまだ仕事がある！

そのような思いの最中に、十名足らずの日曜学校に集まり、神様のお話を耳を傾ける子どもたちの教育を、正式にバトンタッチさせられたのです。今

までお手伝いをしたことはあつても、

いざ受け持つとなると責任のあることです。神父様のお話を、まるでたのしい寓話のようにのんびり聞く子どもたちに考えさせられました。そしてこの仕事を与えられたことの摂理に対して感謝しました。全く神の全能にただただ敬服すると共に、今まで培われてきた私の魂も、期を得たりとばかり活躍をはじめたのです。ところが教会で聖職者の方々が、にじみ出るものを伝え教えられるのと違い、熱意と努力とつけやき刃的な浅い知識だけでは全く情ないことでした。孤軍奮闘、毎日通う学校は頭の教育を受けるところ、教会の学校はこころの教育を受けるところであると、まず第一回目をスタートしたものの、一年生から五年生までの開きと、神様無縁の家庭教育への抵抗は、尋常一様の宗教々育では歯が立たない

ことを知りました。

そうだ！ あの手と足で理解させよう。

そう決めて、資金のこと、設計のこと、本当に大変でした。子どもたちが入れるだけの広さをまず決めました。小学生の高学年は、円を画く時にさつと力を貸してくれましたし、建築予定の場所に、幼稚園のたいこばしがかかるのを取り除くのに、経費節約のため職人を頼まず、夫の助けを得て、生徒たち皆で、四すみの、けっこうがんにようなコンクリート工事をほり起こし、移し運びました。

半経二メートルの円周を六等分してみました。

円筒形では窓やドアがむずかしからうし、四角では面白くなさそうだし、と考へて六角型の建物を建てることにした。子どもたちには、教会を建てよ

う、という話し合いのものである。実際に教会を建てる、ということはいろいろな規約や制約があり、税金のことにまでわずらわしい問題がからまってくる、とおどかさされて、あくまでもこどもたちとわたしの間での納得した教会ということにした。あとでの話になるけれど、献堂式の祝別をして下さった成城教会の主任司祭様は、さすがにわきまえていらして、「小さなお聖堂キリシタンと申しませうか、かわいらしい祈りの家と申しませうか——」とこの建物をお呼びになった。

土台のブロックや腰板はり等、子どもたちの手で、と思ったけれど実際はそういう考えは甘く、基礎工事にしろ、棟上げまでの簡単そうな仕事も、とても手は出せなかった。

六角の上に四角い鐘楼をのせる仕事、そのものが大へんな腕のいる仕事であ

ると、棟梁はぼやいた。

屋根の骨組みができ、てっぺんに、がっちり十字架が建った時、私は泣けて泣けて仕方がなかった。全く行き当りばったりで、資金などちよūd値上がりの材木代にも足りなかった。でも、持ち前の楽天的な性格と、いつも神様がよいようにはからってください、という安心感で「聖旨のままに」と祈りつづけ、ある時、青山の骨董店の店先に、うってつけの釣鐘を見つけ、大急ぎでありつた額の現金を用意し、また駆け戻って、その由緒あると言う舶来の鐘を手に入れた時の喜び！この重いものをよく持って来た、独りでおかしがった。たしかに鐘をつるす夢で買ったのだけれど、何というところか、造つてもらうのか、宿題で買うのか、造つてもらうのか、宿題

棟梁はこの重さに耐えさせるために、

設計を変えて太い柱を一本横にわたしてくれた。

子どもたちの手におえない仕事は、あっさり頼んで、その間一週間、一、二回あつまって、心の勉強は少しずつ進め、知らない人のために祈ることも覚えた。平行して、ガラスにステイン、ドグラスふうの絵を画く計画を進めて行った。せつかくハワイの初代教会を模したこの建物に、似合った窓を入れるのは、大へんな仕事である。賀川豊彦師の建てられた古い方の教会を思い出し、子どもたち全員で電車に乗って見に行ったが、それはあまりにもさびしい建物であった。しばらくして夫に連れて行ってもらったサレジオ学園の江戸のサンタマリアの聖堂は、反対になんとも絢爛豪華で、金箔のまばゆきは、なぜかわびしくもあった。

いつの間にか十六、七名にふえた生

徒たちを、四つのグループにわけ、皆で話し合つて窓の絵を決めた。ガラス屋に相談に行き、一番安いガラスの寸法のとり方と、こちらの寸法とを考え合わせて60×40を一面に四枚入れるこ



とにした。きつそくガラス戸の形と、教会のそれらしく一番上を半円にした寸法を建具屋に渡し、さてその段階でまだどのようにしてステンドグラスふうの感じを出そうか思案中であった。

油絵の絵具で画く、黒でまわりの線画きをする。ラッカーで画いた方がいい。そのころペンキ屋の主人が、親切そうに教えてくれた。油絵の絵の具もラッカーも教会らしい光を透しませんよ、セロファンを切つてはめ込むのが一番ですよ、と。いくら相手が小学生でも、ちょっと大変な労作である。私にはなげなく、ガラス屋がサンプルにくれた画用紙大のこまかいもようの入った厚いガラス板に、手許のオレンジ色のマジックをこすつてみた。お陽さまにかざすと美しく光った。何ということはない。

キリスト像と聖母子像と、大天使ガブリエルと聖女テレジアの四枚の絵は、子どもたちだけの手によって見事に画かれた。マジックインクで。

鐘樓の屋根は、絵本や子どもの絵によく画かれるうろこもようにしたかつ

た。一面を原型通り採寸して、十五枚のうろこの屋根にした。一枚一枚、下図通りに重なりを考えて、鋸で切つた。サンドペーパーでまわりをなめらかに仕上げた。四面分六十枚のうろこ作りは、いくら四ミリの耐水ベニヤとはいえ、なみ大抵ではなかった。またそれを原型にベニヤを切り、その上に接着剤で一枚一枚はりつけた。

四枚の屋根は、はしごで運び上げ、杉板の上にビニールを二重にはりめぐらし、接着剤で充分とめて、うろここのついた屋根を一枚ずつのせ、釘でうちつけた。ビニール張りから、終始子どもたちはよく手伝い、足をすべらせたら——とはらはらし通しの私の心配など知らぬげであった。五年生の女兒は、こういう仕事をほんとに楽しそうに、最後にコーキング剤で雨もりを防ぐ仕事も、チューブのおぼけのようであらう

うん力を入れないと出ないのを、お湯であたためたためよく奮闘した。この生徒は神様の存在を信じないと生きていた。なぜなら、神様って見たこと無いから、と淡々としていた。

最後の仕事は飾りだでした。

化学繊維の壁材は大へん重宝で、水でとくだけで適當の接着力もあり、たなのまわりを、子どもたちはバターナイフやスプーンのスプーン等で器用に飾りました。ペンキは本職に任せました。いよいよ仕上げのじゅうたんは、工事に見えた愛媛県代表で、数カ月東南アジアを視察して来たという青年の善意で無料になりました。これを聞いた夫は、さっそくお菓子折でも持ってお礼に行けといい、なお、わが家に目下必要なカーテンとじゅうたん敷の工事を発注した。こういう夫の支えがあったこそ、何事もおそれずわが道をゆけるのだろうと思うけれど、ともかく、一人でも多くの子どもに神を懼れること、信じ、愛することを教えたいとねがう。とりもなおさず次の世代の幸せにつながる大事業じゃないかと、今を生きる大人がしてあげられることの一つだと確信する。

筆の走るままにまかせたこの一文の中に、みにくさをお感じになりましたらお許しください。二学期になって着手したこの小さな建物は、クリスマスに聖女テレジアに捧げられ、祝福されて、子どもたちのいこいの部屋になっています。

(みどり会)

## 幼児の教育 第七十二巻 第五号

五月号 定価二二〇円

昭和四十八年四月二十五日印刷  
昭和四十八年五月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします